

St. Luke's International University Repository

紀要発行にまつわる思い出

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, シュン メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/289

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



紀要発行にまつわる思い出

聖路加看護大学 名誉教授 高 橋 シュン
(第4号～第6号紀要委員長)

紀要委員会から、紀要第20号発行を記念して歴代紀要委員長に、当時を振り返り、何かを書くようにと依頼がありました。先ず第20号になりました事は、人の成人式を迎える事となります。心からお喜び申し上げますと共に、委員会の皆様の御努力に対し敬意を表したいと思います。

さて、20年も前のことですので、当時の苦労も色々あったと思います。過去のよい所でありましょう、案外苦労の記憶は薄れ、一緒に作業した時の楽しかったことや、紀要にまつわる他の事の方が記憶に残っています。それでも参考になるものと思い古い紀要を引張り出して見ましたが、肝心の第1、2号が見当りませんでした。そして花沢さんに送って頂いた次第でした。

昭和47年(1972年)に、文部省の科学研究費補助金(一般C)を頂くことが出来ましたので、「Vital signsに関する教育内容及びその方法の検討」の研究を紀要第1号(昭和48年)に掲載することが出来ました。当時、大学には、コンピューターもワープロもなく、専ら卓上計算器とソロバンで統計処理をしたように憶えています。今日の状況に比べますと、格段の差を感じます。

私共教師は、クラスの準備、各種委員会の準備等で、夕方迄かかるのが常でした。研究のメンバーは、夕食後も大学に残り、共に計画を練り、作業の段取りを作ったものでした。多分、その頃からだったと思いますが、看護教員各自が、大学の玄関の鍵を持つようになったと思います。

紀要第1号が発行された前後であったと思いますが、我校にも学生運動の波が押寄せて来ました。大学と学生のコミュニケーションをよくする目的で、「学園ニュース」が発行されました。今日も尚、それが続けられていることの意義は大きいことで、委員の方々に敬意を表します。前田学部長の後を引継いで、昭和50年から、紀要委員長となりました。その頃、教員の数も少なく、教員の皆さんらが、いくつかの委員のメンバーでした。

それに加えて、文部省委託研修生を受けたり、短大卒者のための学部編入制度の発足もこの頃でした。教員数を増さずということ、みんな大変な仕事量を持ってました。

研究は、今日のように便利な器具もない時代でしたが、他科の看護教員スタッフ、臨床からのメンバーも加わり、作業を共にしたことは、相互間の理解と親密を深め合えた大きな成果であったと言えます。私共の、ささやかな研究ではありましたが、紀要発行に間に合うようにと、夜半まで作業をした日が続きました。これが成し終えた瞬間の喜びは例えようもありませんでした。安堵感と開放感で一杯でした。このような状況下で、紀要の第1号が生れ、次々と続いた次第です。忘れてならないことは、紀要の欧文抄録作りには、英語の先生方の御支援を頂きました。又、科学研究補助金の申請書や、研究後の報告書作りなど期日迄に提出しなければならず、近藤先生には大変お世話になりました。その中でも、研究費の使い方はきびしく、ノート一冊買いましても領収書を必ず求めねばなりません。幾度か領収書をもらい忘れ、翌日それをもらいに行ったこともありました。研究の会計を担当した方はさぞ大変なことであったと思います。

紀要は、教育、研究の重要な意味を持つと同時に、又教員の重要な体験でもある事を学びました。最近の紀要を拝見し感じた事は、研究の内容、方法、特にデータの処理と分析など高度なものとなり大きな進歩を感じます。

今後も、互に知識や経験を分かち合い、困難に遭遇しても一致協力して対処出来る道を紀要を通して、若い人達に示して頂きたいと願っています。第20号紀要の発行を心からお喜び申し上げますと共に委員の皆様へ感謝しつつこの稿を結びます。

紀要第20号発刊に寄せて

東京都立医療短期大学 名誉教授 藤 枝 斌
(第7号～第11号紀要委員長)

今、聖路加看護大学紀要の表紙の右上をみると、「I. S. S. N.-0289-2863」という記号と番号が付記されています。これは国際標準逐次刊行物番号 (International Standard Serials Number) で、わが国では国立国会図書館で登録し、ユネスコを通して広く世界に知らせる公式のもです。専門分野の学会誌は勿論のこと、歴史のある大学の紀要等にもこの番号が付けられています。情報社会といわれる現在、この番号が果たす働きは、学会や大学の存在を広く世界に問うという意味で、大変大きいものがあるといえます。

「聖路加看護大学紀要」にこの番号が付記されるようになったのは、第10号 (昭和59年度) からです。私が編集に関わっていた頃、国会図書館からこの番号を割り当てるという通知を受けました。発行10号目で漸く登録できたことに少し意外な感じもしましたが、とにかく聖路加看護大学が、研究・教育の実績を通して広く世界に評価される手がかりを与えられることになったわけです。教授会で報告したことを今でもよく覚えております。一般に大学の紀要は、専門の学会誌に較べて、その普遍性、客観性という観点から、研究業績発表の場として軽視される風潮がないわけではありませんが、「看護」を「大学」で研究・教育しようという聖路加看護大学の理念からみて、この番号割り当ては大きな意義を持っていたといえます。とくに当時は、大学院研究課程の開設を計画していた時期でしたので、それは一層大きい意味を持つものでした。

現在わが国では、看護大学を設立しようという機運があらこちらで高まっています。看護婦養成所から出発したわが国の看護教育の歴史の中で、「研究」を媒介として「看護教育」をする看護大学は、まず第一に大学の理念の確立と研究方法の開発が大切だと思います。専修学校 (いわゆる専門学校) とは違った教育方法による看護教育は、まさにこれからだと思います。看護についての研究方法を開発し、それを発表する場として大学の紀要は専門学会誌に劣らず大切な存在だと思います。さらに付け加えるならば、今、大学の個性化ということが問われています。大学がその存在意義を個性ある研究・教育によって世に問う場として、紀要の役割を改めて考えてみることも時宜に適っているのではないかと思います。

聖路加看護大学紀要の益々の充実と看護大学としての研究・教育の指標となられることを心から期待しております。